

パブリック・サービス研究分科会 8月夏期研修合宿 「S A(Student Assistant)を活用した大学図書館の今後について(仮)」研究グループ報告書	
日時	2009年8月24日(月)～26日(水)
場所	石和温泉旅館「糸柳」
記録	矢ヶ崎(成城大学)
参加者	川端(多摩大学)、北原(相模女子大学)、小松(日本赤十字看護大学)、小松(東京家政学院大学)、寺久保(東海大学)、内藤(学習院大学)、矢ヶ崎(成城大学)、他1名
欠席者	西嶋(東京農業大学)

1. 進捗状況

研究進捗報告で、今までの経緯と研究、これからの研究の方向性について発表した。そこで加藤先生から、「なぜS Aを取り入れた方がいいと思ったかの理由」「各校の人数構成(専任、非専任の人数)」「図書館員がどう研修していけばいいのか?」「博士課程を終わっている学生の活用」などのアドバイスやヒントをいただいた。

前回のグループ研究で、「図書館員のスキルアップ」の方向性から「S A(Student Assistant)」に重点を置いて研究することが決まり、宿題となっていた国内、国外の大学図書館のS Aの事例について報告し合った。

各事例や先生から頂いたアドバイスを元に、自分たちが考える実施したいS Aについて話し合った。S Aの定義を考えたが、S Aに行ってもらいたい具体的な業務がたくさんあり、なかなかまとまらないため、P・S研究分科会のメンバーにアンケートを行って、優先順位を検討した。

今後のスケジュールを踏まえ、研究報告の概ねの流れを下記のように考えた。

- ① 大学図書館の現状を調査。S Aを取り入れる理由。
- ② アメリカのS A事例を報告。それを日本の事例に置き換えた場合どうなのか。日本のS Aの現状を報告。
- ③ 私たちが考えるS Aの理想、概念。S Aの導入効果。
- ④ そのために必要な研修プログラム

2. 次回定例会までに行うこと(宿題)

- ◆ アメリカの大学の現状調査(E-mail)。
- ◆ 日本の事例(東京女子、お茶大、立教等)を調査(E-mail、または訪問等)
- ◆ 国内、国外のS Aに関連する文献調査
 - アメリカのS Aについて
 - 新人教育プログラム(国内、国外)
- ◆ 人数構成(専任、非専任、アウトソーシング)を調査(P S分科会会員大学、訪問大学)

- ◆ 各自調査内容をレポートとしてまとめる。(A41 枚位)
- ◆ SA を取り入れる理由 (論文)
- ◆ 各自、グループ発表、論文に使用できる「研究タイトル」について考えてくる。

3. 次回の予定

- ※ 宿題の報告
- ※ 日本の事例を踏まえて、SA の提案
- ※ 研修プログラム

以上